名古屋学院大学論集　社会科学篇　第54巻　第3号　pp. 135–166

〔論文〕

大学生の看取する「働くことの意味」をめぐる探索的研究

――大学中退直後のある男性のインタビューを通して――

安　藤　り　か

名古屋学院大学現代社会学部

要　旨

本論の目的は，大学中退直後の男性Sの語りをデータとし，大学生が看取する「働くことの意味」の内容とその背景を探索的に明らかにすることである。データは非構造化インタビューによって採取し，質的データ分析手法SCATを用いて分析した。その結果を，「大学中退までのライフストーリーの分析」および「働くことの意味に直接的に関係する語りの分析」に分けて論じた。そして，総合的に検討し，「ちゃんと（大まかに言うと，規範的な生き方）―非・ちゃんと」をタテ軸，働くことの「目的性―手段性」をヨコ軸とする2軸4象限によって，本論としての働くことの意味の構造を示した。最後に，キャリア教育への示唆を述べた。

キーワード：働くことの意味，大学中退，SCAT，プロジェクトとしての生，ライフストーリー

An exploratory study of the “meaning of working” reflected from university students’ perspective:

――An analysis of a university dropout’s narrative――

Rika ANDO

Faculty of Contemporary Social Studies
Nagoya Gakuin University

＊本稿は，2015年度名古屋学院大学現代社会学部研究奨励金の助成を受けた成果の一部である。

発行日　2018年1月31日

神々がシーシュポスに課した刑罰は，休みなく岩をころがして，ある山の頂まで運び上げるというものであったが，ひとたび山頂にまで達すると，岩はそれ自体の重さでいつもころがり落ちてしまうのであった。無益で希望のない労働ほど怖ろしい懲罰はないと神々が考えたのは，たしかにいくらかはもっともなことであった。

Camus「シーシュポスの神話」より

1　問題と目的

1-1　問題意識

本論は，前著の安藤（2017a）から引き続き，筆者の担当するキャリア教育科目を履修していたことのある大学生（その後，中退）の男性Sとの間で交わした「働くことの意味」をめぐる一連のやりとりを問題意識の出発点とするものである。

まず前著では，現行のキャリア教育科目は，働くことの意味をどのように大学生に伝えているのかを明らかにするために，キャリア教育科目のテキスト10冊の記述内容の分析を行った。その結果，キャリア教育科目において働くことの意味は，各種の意識調査の結果や「働くとは……」「人生の成功とは……」といった規範意識などの羅列的な提示に留まっており，それら全体を俯瞰する体系的な意味の提示には至っていないことを指摘した。

次に前著では，上記の結果を受けて，働くことの意味をより俯瞰的な観点から検討するために，経済学者•杉村（1990）による「近代的労働の意味構図」を概観した。そして，杉村の示した「労働のプレイ化」（働くことの意味として自己実現を過剰に志向すること）が現代日本において若者を含む一定数の人々の共感を集める現実があることを指摘し，その代表例として，IT実業家・タレントの堀江貴文（2017）による，学校・学校・企業（堀江はこれを『鉄のトライアングル』と呼んでいる）のどの組織にもコミットせず，お金のために我慢して働くことを拒否し，ただひたすら自分のやりたいことに没頭して自分で自分の仕事を作り出すべきだとする主張に注目した。

これらの知見を踏まえた上で，本論では，問題意識の出発点となったSに大学中退直後に改めてインタビューを依頼し，その語りを手がかりとして大学生の看取する働くことの意味について探究を試みる。

1-2　Sと筆者の関係性

Sと筆者の関係性については前著の安藤（2017a）で概略を述べたが，ここで前著では割愛した部分も含めて改めて示したい。

201X年の某日，筆者は，友人Kとともに研究室を突然訪ねてきたA大学政経学部3年生の男子学生S（筆者の担当するキャリア教育科目を履修していた）から，ドアを開けるやいなや，「先生，人って何のために働くんですか」と切羽詰まった顔で聞かれた。Sの主な疑問は「普通に大学を

卒業して，普通に就職をしてもバイト先の“社員さん”（以下，シャインさん）[1]のように『辞めたい，辞めたい』と言いながら長時間働くことに何の意味があるのか。好きなことをやって生計を立てているフリーターのほうが生き生きと働いているではないか」というものであった。対して筆者は，自分の企業経験を話し，「正社員としてやりがいを持って働いている人も多い」「正社員とフリーターでは生涯賃金が2億円以上違ってくる」と言うなど，いわばキャリア教育の定番的な応答をした。

しかし，201X年＋1年，Sは家庭の経済的困窮を理由として4年生半ばで大学を中退した。その決断をするまでに筆者は何度か相談も受けたが，その際にもSは「人は何のために働くのか」という疑問を口にしていた。筆者には，たしかにSにはやむを得ない経済的事情はあったものの，それだけが中退の理由ではないと感じられた。つまり，Sは，働くことの意味への疑念，ひいては大学やキャリア教育科目が暗に明に指し示す将来（たとえば，大学を卒業して，“いい会社”に正社員で就職して……というような）に対する不信を潜在的理由として中退したように筆者には思われたのである。

以降，「人って何のために働くんですか」というSの問いは，そのときのSの切羽詰まった表情とともに，筆者の中で問題意識として改めて深く刻まれることになった。そこで，前述したとおり，大学中退直後のSに研究参加を依頼し[2]，その語りをデータとして大学生の看取する働くことの意味の追究を試みたのが本論である。

以下の本論では，先行研究および本論の準拠する質的研究アプローチに関する必要な概観を行った後，「2方法」を示し，「3結果と考察」で『ライフストーリーに関する語り』『働くことの意味に関する語り』に分けて結果と考察を示し，最後にまとめと示唆を述べる。

なお，本論全編にわたってプライバシーの保護を万全にするために，分析には支障が無い範囲で若干の修正を加えてある。

1） ここでSが使った“社員さん”という言葉には特別のニュアンスが込められているように思われる。発音のときのアクセントが，「シャ＼インさん」ではなく，「シャ／インさん」というように後の音節に置かれるのである。このアクセントによるシャインさんは，アルバイトや派遣社員など非正社員が正社員を呼ぶときにのみに用いられ，正社員間では「シャ／イン」とは呼ばない。筆者の経験の範囲では，非正規雇用問題が顕在化した（そして，学校教育においてキャリア教育が開始された）2000年代前半頃から学生から聞くことが増えた。これは，この言葉を発する者（非正社員）に，その都度，雇用上の格差を自覚させる言葉だと言えないだろうか。

2） Sは，筆者のいわば“教え子”である。このような関係性でインタビューを行おうとする際には，教員と学生間の非対称な権力関係に注意しなくてはならない。その理由は，大谷（2014）が，医学教育研究について「学生は不当な扱いを受けたからこの医学部を中退して別の医学部に移籍するということができません。つまり，学生は，研究者と研究参加者との関係性の中から逃れることができず，絶対的な制約を受けているのです」と指摘しているとおりである。しかし，インタビュー依頼時にはSは既に大学を中退していたため，このような非対称な権力関係による問題は解消されていると考えられた。また，中退直後であるため，在学生とほぼ同様の感覚での語りを聴くことが可能になると考えられた。

1-3　大学生が社会人およびフリーターに抱くイメージ

さて，まずは，筆者を尋ねてきたときのSの「普通に大学を卒業して，普通に就職をしてもバイト先のシャインさんのように『辞めたい，辞めたい』と言いながら長時間働くことに何の意味があるのか。好きなことをやって生計を立てているフリーターのほうが生き生きと働いているではないか」という疑問について概観しよう。ここには，会社員に対する否定的イメージ，「好きなこと」を実現しているフリーターへの肯定的イメージ，という2つの相反するイメージが含まれている。

1-3-1　会社員に対する否定的イメージ

「普通に大学を卒業して，普通に就職をしてもバイト先のシャインさんのように『辞めたい，辞めたい』と言いながら長時間働くことに何の意味があるのか。」

まず，社会人（とくに，会社員）[3] に対するこのような否定的なイメージは，ことSのみならず，大学生全般に広く普及していることを指摘しておきたい。たとえば，例年，筆者はキャリア教育科目の授業で会社員のイメージを問うグループディスカッションを実施しているが，学生から発せられる言葉の圧倒的多くは，「疲れている」「我慢が多い」「残業」「過労死」「上司の命令に従わなくてはならない」「社畜」といった否定的なものである。これは，描画法による検討から大学生の有する「社会人・サラリーマンステレオタイプ」の中心像に「スーツとネクタイで忙しく残業をしている男が，残業で疲れ，忙しく，愚痴を言っている」姿があるとした上瀬（2008），KJ法による検討から大学生の社会人イメージとして，「大変・きつい」「だるい・辛い・しんどい」などの「労苦」のイメージが最多であることを明らかにした小川（2016）などの知見とも一致することから大学生全般の傾向とみなしてよいだろう。

では，なぜ大学生は会社員に対して否定的なイメージを持つのか。その理由について，上瀬（2009）は，大学生が社会人と接触する機会の少なさやテレビドラマ等で風刺化された姿に影響されていることに加えて，社会心理学的観点から「就労前の状態におかれた大学生という社会的アイデンティティを高く価値づけるために，彼らが就労している社会人を卑下する過程が生じる

3）「社会人」は，辞書（大辞林）では「学校や家庭などの保護から自立して，実社会で生活する人」と定義されている。これによれば，フリーターも自立して生活していれば社会人に含まれるはずであるが，慣習上は（とりわけ大学関係者の間では），社会人といえば正規雇用者（一部に自営業者も含め）を指す場合が多い。たとえば，文部科学省（2019）が学校基本調査において示している社会人の定義は，①職に就いている者（給料，賃金，報酬，その他の経常的な収入を得る仕事に現に就いている者），②給料，報酬，賃金，その他の経常的な収入を得る仕事から既に退職した者，③主婦・主夫，というものである。「経常的な」ということは，アルバイトなどの非経常的な（近年ではアルバイトとして経常的に勤務する例も少なくないが）仕事に就いている者は社会人ではない，という解釈なのだろう。その是非については慎重に検討しなくてはならないが，本論では，さしあたり現在の慣習上の用法に従うこととし，「社会人」は主に正規雇用者の会社員・職員，「会社員」は主に正社員を指すこととする。

可能性」を指摘している。しかし，宮入（2013）の調査結果によると，大学生の持つ社会人に対する否定的なイメージは，親・兄弟・親戚など「身近にいる人物」から想起されており，それは安藤(2017b)による大学1年生を対象にした自由記述による調査結果とも一致する。したがって，なぜ大学生が会社員に対して否定的なイメージを持つのかを真に理解するためには，社会心理学的側面以外にも，大学生が日常的に接する身近な人物の働く姿から何を看取し，それをいかに意味づけているかというリアリティの解明が必須である。

1-3-2　フリーターに対する肯定的イメージ

「好きなことをやって生計を立てているフリーターのほうが生き生きと働いているではないか。」

大学生のフリーターに対するイメージは，伊藤（2008）によると，自立・自活している人という肯定的イメージと，努力不足・気力不足という否定的イメージの両方が拮抗している。また，戸塚（2008）によると，大学生は，夢を達成するためにフリーターになった「夢追い型」のフリーターに対しては肯定的に評価し，「やりたいことがみつからない」ためになんとなくフリーターになった「無目的型」のフリーターに対しては否定的に評価するという区別をしている。ただし，この二分法的な捉え方は大学生だけのものだけではなく，下村（2002）によると，フリーター自身もフリーターについて，やりたいことのある「良いフリーター」と，やりたいことの無い「悪いフリーター」に区別して捉えている。つまり，大学生であるかフリーターであるかを問わず若者全般に，働く上でやりたいことがあることを是とする傾向があると言える。近年，このような「好きなことや自分のやりたいことを仕事に結びつけて考える傾向」（安達，2004）は，若者の「やりたいこと志向」として教育学や社会学の研究において広く知られている。

やりたいこと志向の観点からは，「辞めたい，辞めたい」と言いながら働いている（つまり，やりたいことを実現できていない）社員さんには働くことの意味が無いということになるのだろうし，対して，好きなことで生計を立てている（つまり，やりたいことを実現できている）フリーターには働くことの意味が十分にあるということになるのだろう。上記したSの「フリーターのほうが生き生きと働いているではないか」というイメージは，まさにやりたいこと志向の上に築かれていると言えるだろう。

一般に，わが国の大学では「学校から職業への移行」という場合に，それは新卒で正社員・正職員になることを前提としており，フリーターになることは「移行」の埒外に置かれている[4)]。大学教育に適う形で正社員になったのにやりたいことが実現できていない，逆に，大学では問題視されていたフリーターがやりたいことを実現できている。仮にそのような現実があるのであれ

4）ただし，そもそも何をもって「正社員」と定義するのかは明確ではない。時給換算にすると最低賃金並み，場合によっては雇用保険（いわゆる失業保険）すらも保証されていない「名ばかり正社員」が増えている現状については，竹信（2017）が詳しく論じている。

ば,それを目の当たりにした大学生は働くことの意味について何を思うのか,考えるのか。また,教育の提供者であるわれわれはそれをどう捉え,教授すればいいのか。それらの課題を解明するためには,「働くとは○○だ」「人生の成功とは△△だ」という規範意識の羅列的な提示を超える深い追究が急務である。

1-4　大学中退の現状

ところで,Sは大学中退者でもあるが,ここで大学中退の現状を確認しておきたい。まず中退者の割合であるが,文部科学省(2014)によると,全国の大学・短大・高等専門学校における全学生数2,991,572人のうち,中退者は79,311人で2.65%である。しかし,これは1年度の中退率であり,少し古いデータになるが,朴澤(2012)による学校基本調査(2003年度入学者)を用いた推計によれば,4年制大学における4年以内中退率は男子10.8%,女子6.1%,8年以内中退率は男子13.7%,女子6.9%である。すなわち,Sのように4年以内で中退している男子学生は,およそ10人に1人の割合で出現するのが現状である。

中退の主な理由は,日本中退予防研究所(2010)による高等教育機関を中退した当事者を対象にした調査によると,多い順に,「学習意欲の喪失」「人間関係」「関心の移行」である。また,労働政策研究・研修機構が実施したハローワークを利用した中退経験者の調査(喜始,2015)によると,学修意欲の喪失を理由とする中退者の7割以上が「目的はあまり考えずにとりあえず大学に進学してみようと思った」と回答しており,中退が進学動機の低さや曖昧さと結びついていることを報告している。

ただし,小林・王・王(2017)の複数回答形式で質問した調査によると,経済的困窮が他の問題(とくに,『家庭に急変があった』『アルバイトが忙しかった』)と複合して中退に至る場合が30.1%を占めている。また,辰巳(2015)による大学中退後の進路に関する調査によると,中退者の約7割が後に大学を卒業し(つまり,大学に再入学か編入学をし),新卒として就職している。これらからは,中退を,単に本人の学業意欲喪失の問題や経済的問題としてみるのではなく,いくつかの多様な要因が重なった末の選択として検討することの必要性が示唆される。

1-5　質的研究アプローチの採用

ここまでみてきたように,Sの「人って何のために働くんですか」という疑問の背景には,社会人に対する否定的なステレオタイプや若者のやりたいこと志向,4年在籍中に10人に1人は生じる大学中退など,現代の大学生の意識・態度の典型ともいえる複数の要素があった。前述のように,本論ではこのS一人を対象とするインタビューをデータとして検討を行うが,そのような場合に強みを発揮するのが質的研究アプローチである。

大谷(2016)によると,質的研究とは,「対象を『量』ではなく,『質そのもの』において把握する研究」であり,仮説検証を目的としない,言語データ(観察記録やインタビュー記録)およびデータ以外の得られる資料も総合して検討する,研究者の主体的解釈を積極的に活用するなどの特徴があり,そのような手続きをとおしてある現象に内在する意味を見いだして理論化するこ

とを目指している。

これらの特徴ゆえに，ときに質的研究には“一般性・普遍性が無い”という批判が向けられることがある。しかし，大谷（2016）は，質的研究の認識論について「納豆」をメタファーとして，次のように論じている。すなわち，「……箸で納豆一粒を取り上げようとする。しかしそうすると，たくさんの納豆がくっついてきて，一粒だけを取り上げることは困難である。質的研究で1人の研究参加者にインタビューすることは，まさにこのようなことである」と述べ，質的研究では個別的・具体的な追究を深めることで，一般性や普遍性をくみ上げることが可能になると強調している。Sの語りを深く追究しようとする本論において，それらの特徴は強みを発揮すると考えられる。

1-6　本論の目的

以上より，本論の目的は，大学中退直後のSの語りをデータとし，大学生が看取する「働くことの意味」の内容とその背景を探索的に明らかにすることである。また，その結果の検討を通じて，大学のキャリア教育科目で扱うべき「働くことの意味」に関する示唆を得ることも企図するものである。

2　方　法

2-1　研究参加者

研究参加者は上記のS（22歳・男性）である。本論1-2に記したように，201X年に筆者を尋ねてきた翌年の201X＋1年にA大学政経学部を4年生の半ばで中退している。インタビューはその2カ月後に行った。インタビュー時現在は，コンビニエンスストアなど3か所でアルバイトをするフリーターである。Sと筆者（インタビュアー）との関係性については，本論1-2で述べたとおりである。なお，Sの見かけ上のイメージを記すなら，全体に明るい印象で，挨拶や入退室時のふるまいは礼儀正しい。在学中は，スポーツウェアブランドのジャージをよく着ており，長めの“茶髪”をゴムで束ねていることもあった（インタビュー時は黒髪の短髪であった）。

2-2　データ採取

データの採取は，非構造化インタビューの形式で行った。非構造化インタビューとは，Fontana ＆Frey（2000/2006）によると，「オープンエンドでエスノグラフィックな（詳細な）インタビュー」で，「問いの範囲を限定しかねないようなどのような事前のカテゴリーも押し付けず，社会のメンバーの複雑な行動を理解する試み」であり，「説明することよりもむしろ理解することを願うもの」である。もちろん，Sには，働くことの意味や大学中退についての思いを聴かせてほしいという旨は依頼時から伝えていたが，実際のインタビューでは，「最近はどんなふうに過ごしているかってことからお話しお願いします」という筆者による冒頭の問いかけ以降は，Sと筆者のざっくばらんな雰囲気の対話として進行した。インタビューの総時間は3時間06分で

あった。インタビューにあたっては，研究主旨と研究者の守秘義務に関する説明を行い，書面による研究参加の同意を得た。

2-3　データ分析

インタビューは録音し，逐語録を作成した後，SCAT（大谷，2008;2011）を用いて分析を行った。SCATは，明確なコーディング手続きを有する分析手法であり，その内容は，①データの中の着目すべき語句，②それを言いかえるためのデータ外の語句，③それを説明するための語句，④そこから浮上するテーマや構成概念，という順番にコードを考案し付与する4ステップのコーディングと，そのコーディングの結果から理論を導き出す手続きから構成される。また，SCATは，小規模な質的データの深い分析に有効な手法であり，1名のインタビュイーを追究していく本論のデータの分析には最も適している。

3　結果と考察

本章では，3-1「ライフストーリーに関する語り」，3-2「『働くことの意味』に関する語り」の順でインタビューの分析結果および考察を示す。

3-1　ライフストーリーに関する語りの分析

以下では，Sの語りの筆者による要約を*斜体*で示し，本文中でのSの発言の引用は〈〉で括って示す。

3-1-1　ソーシャルサポートの不備によるサッカー選手になる夢の頓挫

Sは，両親と妹の4人家族のもとで育った。両親は不仲であり，父親は家に不在がちであった。Sは，小学生の頃から地域の少年サッカークラブ所属しており，中学2年生のときはキャプテンも務め，プロのサッカー選手になることを夢見ていた。しかし，その頃，Sが尊敬していた監督による不正が発覚した上に，その後着任した新しい監督による威圧的指導も問題となり，クラブのメンバーやその保護者達が分裂してしまう騒動が生じた。キャプテンであったSは事態の収拾に努めたが，結果的に別のクラブに移らざるをえなくなった。そこでは短期間でレギュラー入りしたものの，既存メンバーからシューズを隠されるなどのイジメに遭ったり，元プロ選手の監督から体罰を受けたりした。Sは〈実力どうこうっていうより，すごく汚い世界じゃないですか，監督の気に入る，気に入らないとか。それ以降は，もうサッカーいいやみたいなかんじになっちゃって〉，中学卒業と同時にサッカーを辞めた。

ここでSが語っていることは，スポーツ活動による挫折経験とみなすことができる。和・遠藤・大石（2011）は，大学のスポーツ推薦入学者（すなわち，競技能力の高い学生）を対象にした調査から，中・高時代のスポーツ活動の挫折による「競技継続の葛藤」を乗り越えて活動を継続す

る際には，周囲のソーシャルサポートや人間関係が重要な役割を果たすと指摘している。しかし，Sの場合は，キャプテンになれるほどの一定程度の能力がありながらも，信頼していた監督の不正や，チームの分裂，新しいチームでのイジメなどに遭い，ソーシャルサポートに恵まれなかったために競技継続の葛藤を解消することができず，サッカーを辞めるに至ったとみることができるだろう。

ただ，Sの語りの中には，上記の話題以外にも何度か〈僕はスポーツをやってたんで……〉という語りがみられ，Sのアイデンティティ発達において，スポーツ活動が重要な位置を占めているらしいことがうかがえる。一般に，スポーツ活動は健全な人格形成に役立つとされ推奨される傾向があり，スポーツ庁（2016）によると，中学生男子の78.2%（女子は57.2%）が学校の部活動や地域のスポーツクラブに所属しているほどである。また，研究においても，スポーツ活動の経験は，忍耐力，積極性，自己実現意欲など（徳永・橋本・高柳，1994），時間的展望（上野，2007）に肯定的な影響があることが報告されている。

しかし，大野・徳山（2015）は，わが国のスポーツ組織には社会の価値観とは乖離したグループシンク（集団的浅慮：集団での合議により，かえって危険な結論を出してしまうこと）に陥りやすい組織的特性があり，中学•高校生のスポーツ活動においても，体罰を含む厳しい指導があっても黙認される状況があることを問題視している。また，スポーツジャーナリストの林（2015）は，日本のスポーツ界には監督への服従を強いるような指導が浸透しており，「『指示待ちっ子』ばかりが生まれる構造」があると指摘している。Sの場合は，後述する非主体的な進学先決定などの諸点も踏まえると，思春期という自我発達において重要な時期に体罰を受けるような環境に適応してきたがゆえの「指示待ちっ子」的な心性が築かれたとみることも可能であろう。

3-1-2　進学校での「流れ」と「雰囲気」による進学先決定

高校は，公立の中位の進学高校に入学した。勉強は好きではなく，将来については〈自分が活かせる仕事ってことで，まぁスポーツかな〉とぼんやりイメージしていた[5)]。しかし，ほぼ全員が大学へ進学する環境で〈自分もその流れ，とりあえず大学行っとかなきゃいけない。大学って肩書きはやっぱ将来的に必要なんだな〉と感じた。A大学を受験したのは，〈担任の先生からどっか必ず受かるところを受けといがほうがいいと言われて，じゃあ，受けますみたいなかんじで受けた〉ということであり，政経学部を選んだのは〈友達との話で，困ったら法律か経済へ行けみたいなのがあって〉ということであった。結果的に合格したのは，

5）体育方法学を専門とする岡部（2007）は，他の職業に就ける可能性を考えない「安易なプロスポーツ選手志向」に警鐘を鳴らしている。岡部の見積もりによれば，高校硬式野球部員のうちプロ野球に入団できるのは1/473で，さらに1軍で実績をあげているのは1/1700だという。筆者の実感としても，中高時代にスポーツ活動に取り組んでいた男子学生にスポーツ選手あるいはそれ関連以外の職業に興味関心を持たせることに困難を感じることが少なくない（たとえば，スポーツ関連か，“普通の会社員”か，という二者択一的な発想からなかなか脱出できない）。一般には称揚されるスポーツ選手になる夢が，その反面で他の進路への関心を狭めている一面があるのではないかと思われる。

〈かなりの“押さえ”〉のA大学政経学部と，〈心理学系のことがちょっと好きで〉受験したB大学心理学部であった。最終的にA大学政経学部への入学を決めたのは，将来の就職を考えると社会科学系のほうがいいという〈周囲の雰囲気もあったんで政経学部かな〉ということであった。

日本中退予防研究所（2010）による高等教育機関中退者100名インタビュー調査結果は，「中退理由を不本意入学と回答した人の特徴は,『やりたいこと』で学校を決めた人の比率が低く,『周囲の影響』や『ブランド』で決めた人の比率が高い。かなり消極的な大学選択がみられるようである。主体性を欠いたまま入学を欠いたまま入学したために,在学への動機付けが維持できなかったと考えられる」と報告している。まさにSはそれにあてはまることから，入学時に既に中退の予兆があったとみることもできる。

しかし一方で，そのような消極的な理由による大学進学はさほど珍しいことではない。たとえば，「私立大学学生生活白書」（日本私立大学同盟，2015）は，社会科学系学部の学生の進学目的には「大学卒の学歴」「自分のしたいことを探す」が多いことや,大学の選択に「無理をしない傾向」（例：自宅からの通学が可能だったから，自分の実力に合っていたから）があることを指摘している。これらからはいずれも“ぜひこの学問をこの大学で学びたかった”という強い入学動機をうかがうことができない。それにもかかわらず，社会科学系学部に入学した学生の大半は中退せずに4年間で卒業しているのである。したがって，Sの場合は，入学同時が曖昧であったことに加え，入学以後も大学生活に対するコミットメントを維持することができなかったということなのであろう。

3-1-3　ドッペルゲンガー体験（自己像幻視）を契機とする心理学への関心の芽生え

上記のようにSは，心理学部への入学も視野に入れていたが，心理学に関心を持ったきっかけには，〈好きな女の子の考えていることを知りたかった〉という興味とともに，〈未来の自分に会った〉という〈非現実的っていうか，オカルトみたいな〉特異な経験がある。高校3年生のとき，塾帰りにときどき立ち寄っていたファストフード店で，自分の前に並んでいたスーツ姿の男性から振り向きざまに〈『おまえ，ちゃんとやってくれよ』って，いきなり言われた〉という経験をした。その男性は〈顔がもう本当に自分でした。で,声も一緒でした〉というほど自分にそっくりであり，Sは，〈唖然っていうか，すごい変な汗かいて……〉，その人物に声をかけることすらできなかった。当時，Sは大学受験が迫っているにもかかわらず，〈友達のとこで勉強してくるとか言いつつ，友達とずっとゲームしている〉日々を過ごしており,全く勉強をしていなかった。〈自分の中でちゃんとやらなきゃヤバイんだろうなって，多分分かってはいた〉ために，〈自分の意識の範囲外で作り出した偶像というか，そういう力が人間にはあるんだ〉と自分では解釈している。そこで，〈人間の心ってすごいな，心理学もいいかな〉と考え，志望校の一つにB大学心理学部を入れたのである。

自分に瓜二つの人間に出会うという幻覚的な経験は，精神医学ではドッペルゲンガー（自己像幻視）として知られ，古くはFreud（1919/2011）が自我発達上の退行現象の一種として論じている。また，近年では，脳神経医のSacks（2012/2014）が，血流や視覚の障害によるものや，統合失調症によるものなど様々なドッペルゲンガーのタイプを報告している。小泉（1985）は国内における自己像幻視を含む「瓜2つ妄想」の症例21件を検討しているが，いずれも単に瓜二つの人物に会ったということに留まらず被害妄想や誇大妄想などを伴っている。その点，筆者の知る限りではSには精神科疾患の既往歴は無く，また，このときただ1度だけの一瞬の経験だったようである。田辺・小川（1992）は，大学生を対象にした質問紙調査の結果から，青年期における解離性体験（思考・感情・経験が意識や記憶に統合されたいために，一時的にあるいは持続的に人格の統合性が失われる状態）は必ずしも病理的現象ではないとしている。このSの体験も，たまたま前に並んでいた自分と背格好の似た男性に受験を前にした不安や焦りを投影した結果としての一時的な解離現象だったのとみるのが妥当ではないだろうか。

しかし，いずれにしても，その男性から「ちゃんとやってくれよ」というメッセージが投げかけられたとSが認識していることは重要である。幻覚を生じるまでにSがこだわる“ちゃんと”するとはいかなることなのか，本論後半で改めて詳細を論ずることにしたい。

3-1-4　大学入学直後からのパチンコ依存と，その維持を動機とする「働くこと」への参入

さて，A大学政経学部入学直後から，Sは，〈高校のときとのすごいギャップ〉を感じ始めた。中高時代のような学級をベースにした〈コミュニティ〉ができなかったことや，初年次ゼミでも〈仲のいい友達もイマイチできなくて〉，だんだん〈なんか途中から苦しくなってきた〉と思うようになったのである。大学の授業には興味が持てず，授業に出席しても〈ちょこんと座って，スマホいじって終わりみたいな感じ〉であった。〈ヤバイとは思ってましたが，来期からちゃんとやるしかないなと思って。もうそういう全部後回し，後回しで，最終的に自分が困る〉とは意識していた。しかし当時は，〈卒業するつもりでしたし，まぁ，3，4年生で帳尻合わせればいいかなと思ってて。多分，将来的にちゃちゃっと就職してちゃちゃっと生きていければいいんだろう〉思っていた。

そして，〈大学行ってもあんまり楽しくないし，友達もできないし，行きたくないなと思っていたときにパチンコに出会った〉のである。きっかけは家族全員がパチンコ好きの〈パチンコ一家〉の幼馴染みに誘われたことである。その後は，〈大学をフェードアウトするのが早くて〉，5月のゴールデンウィーク明けには既に，〈パチンコか，家でネットゲームをしているか〉の〈そういうクズみたいな生活〉を送るようになった。そして，パチンコ代にあてるために，近所のコンビニエンスストアでアルバイトを始めた。2年生になると，パチンコをやるために毎日店に行くようになり〈実際，パチンコ中毒だったと思います，間違いなく〉という状態になった。

このように，Sは，はや入学後1ヶ月ほどで学業から退却しはじめる。日本中退予防研究所

（2010）のインタビュー調査結果には，親や教師に勧められるまま楽に行ける大学に進学したものの，1年生の6月頃から大学に行かなくなり中退した事例が紹介されている。そこでも「学校に『クラス』がなく，その辺りもギャップを感じた。悩みはしなかったが，友達ができなかった」という当事者の語りが引用されており，中退者の中にSと同様のプロセスを経る学生が一定数いることがうかがえる。友達の有無などは，“大人”の目には取るに足りないことに映るかもしれない。しかし，これはNPO法人NEWWAY（日本中退予防研究所の運営元）の川原（2017）が指摘するように，「1日のうちの大半の時間を過ごすことになる大学でこれといった友達がいないことは『家を出てから帰るまで，誰とも話すことなく一日を終えることがある』ということ」を意味しているのであり[6]，もともと強い入学動機を持たずに入学した上にこれが重なると，本人としては大学生活への著しい不適応感を持たざるを得ないだろう。

そして，その不適応感を解消する受け皿になったのが，Sの場合はパチンコだったとみることができる。一般に，パチンコはギャンブル性の高い“娯楽”とみなされることが多いが，近年は，その強い嗜癖性が問題視されるようになっている。精神科医の帚木（2014）が自らのクリニックを受診したギャンブル病者（病的ギャンブラー）100名を対象にした調査によると，対象者の8割強がパチンコ・スロットに依存しており，ギャンブルの平均開始年齢は20.2歳（すなわち，大学生相当の年齢）であった。大学生のパチンコの経験については，1年生で153人中18人（約12％；スロット経験も含む）（熊上，2014），学年を問わない調査では約62％（スロット経験者は約58％）（福田・田邊，2011）と報告されており，大学生にとってパチンコが身近な存在であることがわかる。

また，柳沢ら（2011）は，パチンコを含むギャンブルへの「はまり度」が高い学生は，ギャンブルをするためにアルバイト時間が長くなる傾向があると指摘している。その是非はさておき，Sの場合は，パチンコへの依存がアルバイトにつながり，結果的に“働くこと”への入口になったとみることができる。

3-1-5　キャリア教育科目における心理学的要素への興味と「とりあえず就職」要素への懐疑

大学の授業の中では，キャリア教育科目は例外的に〈好きな科目〉であった。それは〈先生（筆者）が臨床心理士からこっちの世界に来たって言ってた〉ことと，授業の中の〈ちょっと心理学的な要素〉のために〈他の授業とはイメージが違う〉と感じたからである。〈話はちゃんと聞いてました。スマホもいじっていません〉というようにSとしては比較的真面目に出席していた。ただ，キャリア教育科目も〈今の学校教育って，何でも“とりあえず就職”みたいなかんじ〉と感じられることがあり，漠然としたものではあるが，〈もっと将来の選択肢を広げられる〉，〈もっと（学生の）本質部分を見る〉ような内容も期待していた。

6）ここで川原も言及しているように，最近は「ぼっち」なる，一人でいる人を劣った人間として揶揄する言葉が若者の間に普及している。同時に，「ぼっち」だと周囲にみられることに対する不安や，それを回避しようとする行動の普及も指摘されている（大嶽・多川・吉田，2010；蔵本，2013）。そういう風潮があれば，なおさら大学で友達ができない状態は辛く感じられるのではないだろうか。

前述のように，Sは，大学受験時はB大学心理学部への進学も考えていた。結果的に〈雰囲気〉に流されてA大学政経学部に入学したものの，この語りからは，Sの中では政経関係というよりは心理学への興味が持続していたことがうかがえる。Sの言う〈ちょっと心理学的な要素〉とは，筆者が授業内で実施しているエゴグラム（パーソナリティ検査の一種）やエリクソンの発達理論の紹介，自己理解やコミュニケーション訓練を意図したグループワークなどのことを指しているのだろう。Sは〈話はちゃんと聴いていました〉と語っているが，実際，Sのキャリア教育科目の成績は優秀で，100名ほどが履修していた中で唯一の期末試験満点を取っていた。

しかし，安藤(2015)がレビューしたように，キャリア教育における〈心理学的要素〉については，主に教育社会学領域から“心理主義的傾向”として批判が提出されている。それらの批判的見解（たとえば，佐々木，2009；本田，2009）によれば，キャリア教育は，労働市場や雇用の問題を社会ではなく個人の自己責任に帰することで，結果的に若者に産業社会への“適応”のみを迫り，“抵抗”のための方法（たとえば，労働法の解釈や活用）を教えていない。筆者もそのような傾向への問題意識から，半期15回の授業中，最低でも1，2回は雇用契約や勤務条件に関する基礎知識を取り上げる回を設けているが，それを含めても，学生の立場からみると，Sの言うように〈今の学校教育って，何でも“とりあえず就職”みたいなかんじ〉ということになるのだろうか。

3-1-6　親の離婚による経済的困窮による「底つき」と「働くことの意味」への問いの始動

Sが3年生に進級した頃，数年別居していた両親が正式に離婚することになった。Sと妹は今までどおり母親と暮らすことになったが，母親にはパート収入しか無いため，Sがアルバイト代を家計に入れることになった。朝・昼・夜とそれぞれ別の場所で3つのアルバイトをかけもちし，合算すれば新卒の初任給ほどの収入を得ることができるようになったものの，そのうち半分を家計に入れ，大学の授業料も分割で自分が払うことになった。〈自分が家にお金を入れなくちゃいけない状況に陥って，さすがにこんなことしている場合じゃないと思って〉パチンコにも行かなくなった。昼間に通学できるようなるべく夜勤をするようにしていたが〈大学行っても寝ちゃったり〉という状態が続いた。そしてその頃から〈働くって何やろなぁみたいなのを自分の中で考え始めた〉のである。

一方で，ようやく大学で腹を割って話せる友達ができた。必修科目の再履修クラスで知り合った年上の留年生Kで，お互いに単位取得で苦労していることやインターネットゲーム好きという共通点から意気投合し，〈その辺から，大学が行きたいな，ちょっと楽しくなったな〉と思えることも出てきた。「先生，人って何のために働くんですか」と，Kを伴い筆者の研究室を尋ねてきたのはこの頃のことである。

1980年代以降，わが国の離婚率は上昇傾向にあるとされるが，親の離婚を経験している大学生は，野口（2012）の調査によれば，7.6％（25/328人）である。また，野口は，親の離婚時の子どもの年齢による比較検討から，思春期以降に親の離婚を経験した子どもは親の離婚による否定的な心理的影響（例；自殺願望，自己嫌悪等の感覚）を受けやすい傾向があることを指摘した。

本論のインタビューでは，親の離婚に関する詳細は聴いていないが，当然Sも親の離婚により様々な否定的な感情を経験したであろうことは想像に難くない。

また，そのような心理的負担のみならず，Sには家計を支えるという経済的負担も生じてきた。「ブラックバイト」（大学生であることを尊重しないアルバイト）問題の提起者である大内（2017）は，かつては「レジャーランド」と言われた大学が，近年では「ワーキングプアランド」に変化したとし，親の収入が減じたことにより過剰なアルバイトをせざるをえない大学生が増加したことを問題視している。大学生のいる母子世帯の家計については，阿部（2013）が調査しており，母親の努力や我慢などの自己犠牲によって家計の破綻をなんとか先延ばしにしている実態を明らかにしているが，そこにはSのように大学生の“子ども”による家計負担[7]を加えてもなお困窮するという厳しい側面もあると推測される。

ただ，Sの〈パチンコ中毒〉の問題に限って言うと，経済的困窮がパチンコへの依存的状態から退却する契機になったとみることもできる。依存症の治療・支援方法の一種に，自分の力ではどうにもならない困った状態に直面させることで行動変容につなげようとする「底つき」がある。Sにとっては，図らずも経済的困窮が「底つき」に準ずるような経験となり，パチンコへの依存的状態からの脱却と，腹を割って話せる友達Kとの出会い，そして，働くことの意味への問いの始動につながったとみることは不可能ではないだろう。

3-1-7　中退による喪失と理学療法士になることへの積極的展望

しかし，4年生になっても，単位履修が進まないまま，学費の支払いも滞り始めた。〈学費を払いつつ，家にお金を入れるとなると，けっこう稼がなきゃいけなくなるんですよ，もうしんどくて。どうせ1，2科目しか授業に出られないのにお金払うってのが，抵抗っていうか，なんかもったいないというか，すごく辛いというか〉と感じるようになった。しかし，〈将来が高卒と大卒じゃ全然違うって聞いてる〉ことがどうしても気になり，周囲の社会人に相談してみたが，〈別に高卒でもいいやんみたいなことを言う人って高卒の人しかいないんですよ。大卒の人は，全員とは言えないかもしれないけど，大学は出とけと言うんです〉という答えで，〈やっぱり大学は出ておいたほうがいいのかな〉という思いも強く持った。しかし結果的に，〈休学[8]しようとも思ったんですけど，もうこの状態が続くんだったら，何かもう，もうもうもう，いいよ，もういいよ，って。萎えたっていうか，やーめたってか

7）法学者の早野（1992）は，“親は子どもの大学費用を当然に負担しなければならないのか”という関心のもと，子の大学教育費用が争点となった裁判例の分析・検討を行っている。その結果，親による費用負担については概して肯定的な法的判断が下されているものの，たとえば，子自身にアルバイト収入があり自分の生活を維持できる場合には親による扶養が必要とはみなされない場合もあることを報告している。より近年の法的な状況については早野（2015）に詳しい。

8）休学中の授業料は，国公立大学では原則徴収せず，私立大学では約半数が減額はするものの徴収する（小林・王・王，2017）。A大学でも休学による授業料徴収が行われる。

んじになって〉，大学の事務処理上は学費未納という扱いで4年の夏に大学を中退[9]した。

そして，中退して2カ月経った現在，Sは学生時代から引き続きコンビニエンスストア等3か所でアルバイトをしている。中退については，〈社会は多分大学みたいなとこだと思う。自分次第なんだろうなって。大学にしろ社会にしろ，自分がどうするかって話じゃないですか，ちゃんとやらんかったらやらんかったで，それが回ってくるし。僕ちゃんとやらなかったからこういう結果になったんじゃないですか。〉とふりかえる。今後については，〈理学療法士に3人ぐらい知り合いがいていろいろ話を聴いてるのもあるし，人間の深層心理みたいなのをもっともっと深く探っていければいいと思っている〉ことから，〈心理学系か理学療法系の学校へ通い直す〉という〈けっこう強い気持ち〉を持つようになっている。

ここの〈何かもう，もうもうもう，いいよ，もういいよ，って。〉でSはやや声を荒げたが，中退が悩んだ末の選択であったことがうかがわれる。日本中退予防研究所（2010）が「すべての中退は不本意」述べるように，いわゆる仮面浪人などの特殊な例を除けば，最初から辞めるつもりで入学する学生はいないのである。

労働政策研究・研修機構が実施したハローワークを利用した中退経験者の調査（喜始，2015）によると，中退前後の悩みや困難として，突出して多くあげられたのは「求職活動・仕事に関すること」と「将来展望・人生設計・社会復帰」であった。ここでの〈将来が高卒と大卒じゃ全然違う……〉というSの語りも求職や将来展望に関する悩みを示していると考えられる。

また，日本中退予防研究所（2010）は，中退者の受ける心理的ダメージとして，自分に対する劣等感，親等への罪悪感，世間体の悪さなどがあることを指摘している。Sは，〈自分次第〉，〈自分がどうするかって話〉，〈僕はちゃんとやらなかったからこういう結果になったんじゃないですか〉と語ったが，これらからは自責や自嘲，あるいは諦め・開き直りなどの多様な思いが入り混じっている心境をうかがうことができる。

また，心理学的にみれば，大学中退は一種の喪失体験と捉えることができるだろう。池内・藤原（2009）は質問紙調査の結果から，やる気や目標など「精神的自己」の喪失からの典型的な回復過程として，「パニック→絶望感→無気力→現実直視・受容→立ち直り」を指摘した。これになぞらえてみると，自責や諦めを口にしながらも，〈心理学系か理学療法系の学校へ通い直す〉と語るSは，インタビュー時現在，「立ち直り」に向かっている途上だと考えることができる。

なお，本論1-4で触れたように辰巳（2015）によると，中退者の約7割が後に大学に再入学か編入学をしている。吉塚ら（2016）によると，理学療法士•作業療法士の養成校（とくに専門学校）には社会人経験者や大学他学部を卒業または中退した学生（1年次の平均年齢26.7±5.9歳）が一定数おり，現役生（1年次の平均年齢18.5±0.6歳）よりも学習内容自体に対する動機付けが高い

9）このような学費未納による退学を「除籍」とする大学もあるが，中退と除籍の区別には統一基準があるわけではなく大学間で解釈が異なる（小林・王・王，2017）。そのため本論では，より広義で一般的な用語である「中退」で統一している。

傾向がある。いずれSも，そのような動機付けが高い非現役生として理学療法士養成過程に入学する日を迎えるのだろうか。

3-1-8　小括

以上の分析から，大学中退までのSのライフストーリーは次のように紡ぐことができる。

すなわち，Sは，中学時代に，ソーシャルサポートの不備によるサッカー選手になる夢の頓挫を経験した。また，高校時代には，進学校での「流れ」と「雰囲気」による進学先決定と，ドッペルゲンガー体験（自己像幻視）を契機とする心理学への関心の芽生えを経験した。大学入学後は，直後からのパチンコ依存と，その維持を動機とする「働くこと」への参入，キャリア教育科目における心理学的要素への興味と「とりあえず就職」要素への懐疑を経て，親の離婚と経済的困窮による「底つき」と「働くことの意味」への問いの始動を経験した。そして，中退による喪失と理学療法士への積極的展望に至った。

繰り返しになるが，本論は「先生，人って何のために働くんですか？」というSの問いを出発点としている。上記のようなライフストーリーを辿る中で，Sは働くことの意味に関して，何を，どのように看取してきたのだろうか。次節では，働くことの意味に関するSの認識を分析し，総合的に考察する。

3-2 「働くことの意味」に関する語りの分析

本論の3時間6分に及ぶ非構造化面接の中では，随所で「働くことの意味」に直接的に関係するSの語りがみられた。それらを，前節のSのライフストーリー，および，前著（安藤，2017a）で検討した杉村（1990）と堀江（2017）の主張も踏まえて総合的に検討して導き出した働くことの意味の構造を，図1のように2軸4象限で整理した。予め概略を記せば，座標のタテ軸には，Sの用いた言葉を使い「ちゃんと（大まかに言うと，規範的な生き方）―非・ちゃんと」を，ヨコ軸には，働くことの意味における「目的性―手段性」を設定した。また，この座標軸で区分される各象限には，①“感謝されること”動因による働くことの意味，②銀行員とシャインさんによる働くことの意味，③バックパッカーによる働くことの意味，④堀江（2017）の提唱する働くことの意味，を配置した。以下では，それらについて論じる。

3-2-1　座標軸の内容

①　タテ軸（ちゃんと／非ちゃんと）

座標のタテ軸には，Sの語りに登場した言葉を用いて「ちゃんと」と「非・ちゃんと」を設定した。Sは，3時間6分のインタビュー中，「ちゃんと」という言葉を実に66回も使っている。これは単なる口癖というよりは，それほどまでに「ちゃんと」したあり方にこだわりがあると解釈するべきであろう。また，そのことは高校生のときのドッペルゲンガー体験においても，自分と瓜二つの人物（幻影）から放たれたメッセージが「おまえ，ちゃんとやってくれよ」であったことによっても裏付けられる。「ちゃんと」の意味について，Sは次のように語る。

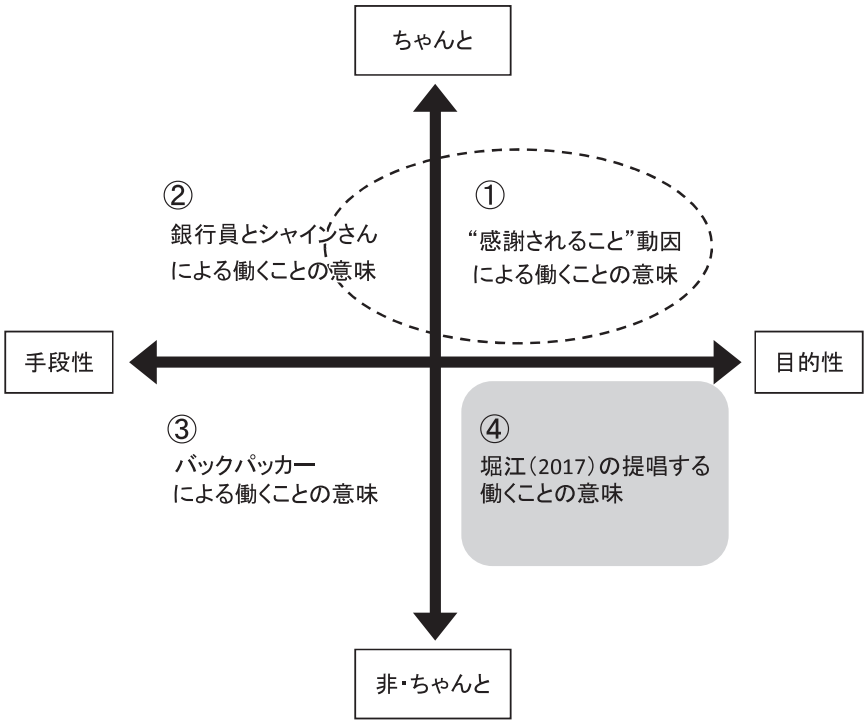

図1　Sの語りに基づく「働くことの意味」の構造

子どもの頃から多分，「ちゃんと，ちゃんと」って親とか学校から聞いてきたので，多分その「ちゃんと」っていうのは，定職に就いて，まあ朝ちゃんと出てって，で，まあその，帰ってきて，一定のリズムで生活してて，子どもいるとか，まあ多分そういうのが，ちゃんとしてる人かなって思います，「ちゃんと」っていうのは。（中略）要はその，その「ちゃんと」，僕の中で言うその「ちゃんと」の仕事をしてる人たちは，すごい苦しんでるんで，辞めたい辞めたいとか言ってる人が，もう大半なので，その「ちゃんと」っていうのは。だったら別にそんなちゃんとやんなくてもいいし，生き方人それぞれ，まあその，子どもを，たとえば結婚してるとか，子どもができて，その子どもを養っていかないといけないとかっていうのなら，まあちょっと話は変わってくるのかなと思いますけど，まあそういう状況でなければ，そう何か，そういう，自分を殺してまで，「ちゃんと」をする意味っていうのはないよねと思います。

この語りから，Sの言う「ちゃんと」とは，ⓐ定職，ⓑ一定の時間リズム，ⓒ子どもがいる既婚者，という3要件を充たしている状態であることがわかる。

ⓐ定職とは，辞書（大辞林）によれば，「臨時のではない，定まった職業」である。アルバイトや派遣社員などの期間に定めのある雇用ではなく，かつ，一つの職業・職場に留まって働いて

いることを意味していることから，端的に言えば，“定職に就いている”とは，正社員（または自営業の場合もあるだろう）[10] であることを指していると言える。

ⓑ一定の時間リズムは，よく言う「9時から5時まで」に代表される正社員が働く上での定刻性を指しているのだろう。通常，われわれは正社員がそのような時間リズムで働いていることについて特段の関心を持たない。しかし今津（2008）によると，小学校から始まる「時間割」に代表される学校生活リズムの厳格な訓練は，近代の工場労働に端を発する産業社会のリズムへの適応を図る「暗黙のカリキュラム」であり，われわれはそのような時間感覚を身体化している。つまり，われわれは企業の業務リズムに適応し正社員として働けるように，小学校以来の学校教育の中で訓練されてきたとも言えるのである。

同様に，ⓒ子どもがいる既婚者に関しても，正社員であることと関わりが深い。勝又（2003）によると，国際比較した場合，わが国における社会保障給付に占める家族政策支出はわずかであるが，その理由の一つには，企業の福利厚生として家族手当が位置付けられてきたことがある。

家族手当（扶養手当，育児支援手当などと呼ばれることもある）は，1950年代に始まる高度成長期に構築されたいわゆる日本的雇用システムにおいて，正社員に対する処遇として定着し（厚生労働省，2015a），近年は撤廃する企業も増えたものの，それでも66.9％の企業が支給している（厚生労働省，2015b）。つまり，わが国では，子どもを持つにしても，正社員でないと，経済的な保障の恩恵に与れないような社会制度が機能してきたと言える[11]。

以上から，Sの言うⓐ定職，ⓑ一定の時間リズム，ⓒ子どもがいる既婚者，という3要件を充たす「ちゃんと」とは，いわば“正社員性”を指していると考えられる。そこで，本論では，その対極として，“非・正社員性”を帯びる「非・ちゃんと」を設定することにする。具体的には，ⓐ非正社員（あるいは，それ的な働き方をしている，頻回転職をしている，など），ⓑ不規則な時間リズム，ⓒ未婚で子どもがいない，というような要件がそれに該当すると言えるだろう。

②　ヨコ軸（手段性／目的性）

座標軸のヨコ軸には，前著（安藤，2017a）で概観した杉村（1990）による「近代的労働の意味構図」

10）ここで言う自営業者の中には，個人で事業を営む「個人事業主」（例：個人商店の店主，複数の取引先から仕事を受注している広告デザイナー）も含む。個人事業主は「定職」と言えるが，実態としてアルバイトと同等の職務に従事している人も少なくなく，それに乗じて不当な扱いをする企業もある。数年前，大手飲食店チェーン運営企業が，“アルバイトとは雇用契約を結んでいるのではなく，個人事業主への業務委託契約を結んでいるのだから，残業代を支払う必要は無い”という主旨の主張をしてアルバイトへの残業代支払いを拒否した事件が大きく報道されたが（その後，和解などを経て当該企業では改善が図られているようである），それはアルバイトと個人事業主の区分の曖昧さを示す端的な例だろう。

11）経済雑誌「週刊東洋経済」（2016年7月9日号）は，「『子なし』の真実」という全30頁の特集を組み，子どものいない夫婦のインタビューやアンケート調査，子育て優遇の是非，里親制度などの実態に言及している。企業の経営者や管理職の読者が多いとされる同誌でこのようなテーマを扱うということは，企業も子どもを持つことを当然とする価値観に問題意識を持ち始めているということの現れなのだろうか。

を参考に，「手段性」（働くことそれ自体には意味が無く，何か他の目的を達成する手段となる場合のみ働くことの意味が生じると捉える），「目的性」（働くことそれ自体に意味が内在していると捉える）とを設定した。

なお，杉村の「近代的労働の意味構図」は，諸手段を用いて目的物を産出するという「目的―手段」をタテ軸，企業組織の中で協働するという「個人―集団」をヨコ軸とする2軸4象限で構成されている[12)]。このうち，後者の「個人―集団」に関連する内容は，Sの語りにはみられなかったため，本論では前者の「目的―手段」という観点のみを参考にした。

3-2-2　象限の内容

①「ちゃんと×目的性」“感謝されること”動因による働くことの意味

この象限に該当するのは，「ちゃんと」していて，「目的性」（働くこと自体に意味が内在している）を有する働くことの意味である。ここには下記のSの語りにみられる“感謝されること”を動因とする働き方があてはまるだろう。前述のように，現在のSは理学療法士（国家資格が必要な，定職性の高い『ちゃんと』した職業）になることを考え始めている。その理由について，Sは次のように語る。

> *まぁ，スポーツつながりプラス，人を支える的な意味で。リハビリ系って多分，心理的なサポートも大事だと思うんですけど，励ますじゃないけど，この患者さんがどうやれば一緒に頑張れるのだろうかっていうのを一緒になって考えられるんだと思うんで，そういう支えになっていけるような仕事をやりたいなってかんじなんですかね。［筆者：なんで支えるとか，そういうふうに思うようになったんだろう？］直接的に人を支えられる立場にいたいって，なんでかな，思うところありまして。多分，いろんな仕事で，巡り巡って誰かの助けにはなっていると思うんです。たとえばですけど，このコップを作りましたと。コップを作ったことで直接お礼は言われないけど，でもこういうとこで役に立ってるじゃないですか，社会の仕組みとしては。そうなんですけど，でも僕はもっと直接的にサポートできたらいいなって。［筆者：さっきのあの『ちゃんと』っていうのと何か関係あるのかな。辞めたい辞めたいって言っている人達って，そういう意味では人にダイレクトに役に立つような仕事をしているわけじゃないんだよね？］銀行員とか。まぁでもお金をどうこうっていう意味では助かっているんです。でもあぁありがとうみたいなかんじでは思われていないんですよ，多分。自分のエゴかもしれないけど，ありがとうって言ってほしい。*

上記でSは，〈直接的に人を支える立場にいたい〉，かつ，〈ありがとうって言ってほしい〉という希望を語っているが，筆者の実感では，この10年ほどで同様のことをと言う大学生は顕著

12）ここで杉村（1990）が示した象限は，①労働が組織の中の目的的活動とみなされる「貢献」，②労働が個人にとっての内在的な意味を持つとみなされる「自己実現」，③労働が自分の目的実現のための単なる手段とみなされる「苦痛」，④労働が組織のための手段の活動とみなされる「役割」，である。

に増えている。そのことは,1969年から継続実施されている新入社員「働くことの意識調査」(日本生産性本部・日本経済青年協議会，2017）において，就労意識に関する16項目中「社会や人から感謝される仕事がしたい」が2010年度以降，第1位（例年95％前後を維持）に躍り出たことによっても裏付けられるだろう[13)]。

もっとも，この場合の“感謝されること”とは，世のため人のために献身的に奉仕したいという高邁で純粋な精神に基づくものでは必ずしもなく，Sが〈自分のエゴかもしれないけど〉と但し書きを付けるように，日々自分のやる仕事に明確な手応えがほしいという一種の自己承認欲求に基づくものであると推測される。というのは,上記の「働くことの意識調査」では,「働く目的」も質問しているが，経年変化をみると，近年になるほど「楽しい生活をしたい」という回答が突出して上昇する一方で,「社会に役に立つ」という回答は減少傾向にあるからである。

このような変化の背景を考えるときに，同調査に長年参画している岩間（2010）による指摘は重要である。岩間によると，働くことの意味は，戦後から高度成長期を通して「生きていくために必要不可欠ななりわい」であったが，低成長期に入り，モノが求心力を失った現代では「手応えのある人生をおくるための自己探求」に変化した。また，岩間は，この自己探求は，自分の満足感でしか測ることができず，これで十分満足というゴールが不明瞭であるため，“これでいいのか？”という際限の無い自問自答に若者を急き立てていると指摘している。これを踏まえれば，Sの〈ありがとうって言ってほしい〉という要求は，ゴールが不明瞭な中で，なんとか働くことに意味を見つけ出して「ちゃんと」働こうとする意欲から生じていると解釈できないだろうか。

しかし，その感謝されることへの希求は，ともすると，“感謝”を得る手段として働くというという状態に移行しがちな可能性を含んでいる（図1では，点線でその可能性を表示している)。本田（2008）は，奉仕性や自己実現欲求が「働きすぎ」に転化しやすいことを指摘し，それらを動因とする高水準の能力発揮を，雇用の保障や高賃金という代価なしに引き出そうとする「〈やりがい〉の搾取」を行うメカニズムが現代の産業社会で拡大しているとして警鐘を鳴らしている。

たしかに“感謝をされる仕事”,“ありがとうと言われる仕事”というイメージは多くの人にとっていかにも心地よく映る。しかし，自己啓発本の世界的ロングセラー「人を動かす」の著者として知られるCarnegie（1944/1999）が述べるように「人間は生まれつき感謝を忘れやすくできている。だから絶えず感謝を期待していることは，みずから進んで心痛を求めていることになる」

13）その背景の一つとして，多くの大学生が従事する外食産業等での接客アルバイトの変質があると筆者は推測している。外食市場は，1990年代に市場頭打ちになり，2010年代以降は低価格競争や業種を超えた競争激化（例；コンビニエンスストアによる品揃え充実等）にさらされるようになった（三井住友銀行，2017)。そのような中，費用をかけずにアルバイトを効率良く使うために，“お客様からの感謝”を報酬とする精神論を掲げる企業が増えたのではないだろうか。そこでアルバイト達は“感謝”を得ることができるよう教育の対象になるばかりではなく，数カ月程度で“バイトリーダー”に昇格し（時給はほとんど変わらないが）後輩アルバイトにその精神論を伝授する役にもなる。つまり,近年の大学生は，働くことの経験の入口で，“感謝されること”を最優先とする姿勢を学ぶのではないだろうか。

(p. 202)というのが現実ではないだろうか[14]。自分が働いたことの結果として感謝されることと，最初から感謝されることを動因として働くことでは，その帰結は大きく異なってくることには注意が必要であると思われる。

② 「ちゃんと×手段性」…銀行員とシャインさんによる働くことの意味

この象限に該当するのは,「ちゃんと」していて,「手段性」(働くことそれ自体には意味が無く，何か他の目的を達成する手段となる場合のみ働くことの意味が生じる）を有する働くことの意味である。

ここには下記のSの語りに登場する銀行員とシャインさんの働き方があてはまるだろう。Sは次のように語る。

> *仕事を辞めたい辞めたいって言っている銀行員の知り合いがいて，「じゃぁ，なんで働いているんですか」って聞いたら「いや，生きるため」って言うんですけど，生きるために必要なら必要最低限でいいと思うんですよ。なんかもう毎日朝早く行って長い時間働いて「辞めたい，辛い」って言うんだったら，もっと楽な仕事があるし，自分の時間が取れる方法があると思うんですけど,生きるためだったら多分,他の仕事でもいいと思うんですよ。あと，バイト先のラーメン店のシャインさんですね。マジでずっと働いていて，ずっと「ほんま，辞めたい」と言っていて，じゃぁなんで辞めないのかなと思って。何をもって生きている，なんで生きてんのかなと思ったときに，僕はそういうの嫌だなって。*
>
> *じゃぁ，僕自身，なんで働いているのかって思ったときに，家にけっこうなお金を入れているし，そのためにオレは生きてるのかな，って考えると，今死んでも何も思わんだろうなとか。でも，やっぱり自分じゃ死ねないですよ，怖くて。飛び降りたり，突き刺すのも怖いじゃないですか。それは無理なって思ったときに,ちょっと寂しいなって思って。たとえば，車買うために仕事をしているとかそういうのは本人が良ければいいことなんですけど，辞めたい辞めたい，辛い辛い，って言ってたのに，なんで仕事をする，続けられるんだろうと疑問です。なんで生きているか分からずに仕事しているみたいなのは，ただただお金がたまっていく状況っていうの人間としてどうなんだろうなぁと思います。悲しすぎます，本当に。寂しすぎますよ，それは。*

この語りの前半に登場するような，〈『辞めたい，辛い』〉と言いながらも，〈『生きるため』〉と称して働いている人々の姿にわれわれは既視感を抱かないだろうか。少なくとも，本論1.1（1）で示した上瀬（2008）が，大学生の持つ典型的な社会人イメージとしてあげた「スーツとネクタ

14）日本能率協会（2016）の調査によると，働いている人の40.3%が職場で「誰からも感謝されていない」と回答しているが，対人援助職に限定すれば相手から直接的に感謝される機会は比較的多いと推測される。それでも，臨床心理学の泰斗・河合隼雄（1991）は，心理カウンセラーが援助に苦労した相談者ほどめったに感謝の言葉を言わないという例をあげ，そして，他人に心から感謝することは実は難しいことであり，心の状態が強い人だけが感謝をすることができると述べている。

イで忙しく残業をしている男が，残業で疲れ，忙しく，愚痴を言っている」姿とは一致していると言える。つまり，Sや，大学生達の抱く社会人に対するイメージは現実から遊離したものではなく，むしろ現実から看取されたものだと言えるのである。

また，Sの語りは，銀行員やシャインさんのあり方に対する＜何を持って生きている，なんで生きてんのかなと思ったときに，僕はそういうの嫌だなって。＞という認識の語りから，その直後の＜じゃぁ，僕自身，なんで働いているのかって思ったときに＞という語りに移行している。さらに，その＜僕自身，なんで働いているのか＞の問いは，＜今死んでも何も思わんだろう＞＜やっぱり自分じゃ死ねない＞＜飛び降り＞＜突き刺す＞という希死念慮とも解釈できる語りに着地している。

つまり，＜なんで生きてんのか＞という語りは，いつのまにか＜なんで働いているのか＞という語りにすり替わっているのであり，そして，自分が＜なんで働いているか＞というその語りは，自分がそもそも生きていること自体を否定するかのような認識の吐露へとつながっているのである。

ここからはまず，Sの中で“働くこと”と“生きること”が不可分に連結していることがうかがえる。ただし，どうやらその際の“働くこと”とは，ただ単に働くことを指しているのではない。そこでいう“働くこと”とは，働くことによって生み出される“成果”によって，“生きること”が肯定されたり，あるいは，否定されたりするという意味付けを前提にしているのである。そう考えた場合，Sの語りの根底に，“働くことは，生きることの何らかの目的を達成するための手段である”という観念を読み取ることができるのではないだろうか。

このような“働くことは生きるための手段である”とする考えは，現代では広く普及している社会通念の一つであり，これに反論することは非常に難しい。しかし，大庭（2008）は，圧倒的な正解であるかのような，この“働くことは生きるための手段である”という命題を問題視し，倫理学の立場から論考を行っている。すなわち，大庭は，有利な交換比率を追求する市場原理が浸透した現代社会では，生きることの意味が「自分の能力あるいはその成果を市場に出して，それと引き換えに衣食住や娯楽の必要をみたす商品を得ることだ」と歪曲されているとし，「生きるとは，自分が所有する身体・能力を活用して，自分の生から，快と満足を絞り出すプロジェクトだ」という「プロジェクトとしての生」という観念が生じているとしている。そして，「プロジェクトとしての生」の下では，個人は「自分のもの」（生命・身体・諸能力）を元手としたプロジェクトを経営する事業主であり，もし達成目標をクリアできなかったら，それは事業経営の失敗として，元手を有効に活用できなかった「自己責任」となり，それによる「負け組」の位置から這い上がるためのさらなる自助努力が必要になるという「きわめていびつな人生観」が形成されている，というのが大庭の指摘である。

翻って，Sの語りに大庭の指摘をあてはめてみると次のような解釈ができないだろうか。件の銀行員やシャインさんは，何らかの生きる目標（おそらく，『やりたいこと』『やりがい』といったこと）を達成できないことを「自己責任」と捉え，その状態を打破するための自助努力として「自分のもの」をさらに投入し働き続けるという選択をしているのではないか（その姿は，本論

冒頭に引用したシーシュポスの姿に重なる)。そして,Sはそのような「プロジェクトとしての生」から生じる働き方の無為さに批判的な目を向けているのではないだろうか。

ただし，そう批判しているS自身も,「プロジェクトとしての生」観念を内在化しており，3つのアルバイトを掛け持ちし「自分のもの」を投入し切っても快や満足を絞り出せないことから,「プロジェクト」の「負け組」として,〈今死んでも何も思わんだろうな〉と生きること自体をも否定的に捉えてしまうという発想に陥っているのではないだろうか。仮にそう考えると,Sが「先生，人って何のために働くんですか」と尋ねてきたときのあの切羽詰まった表情は当時のSがまさに生死の実存に瀕していたことの証左のように筆者には思われるのである。

③ 「非・ちゃんと×手段性」バックパッカーの働くことの意味

この象限に該当するのは,「非・ちゃんと」(すなわち，非・正社員性）にあてはまり，手段性を有している働くことの意味である。ここには下記のSの語りに登場するバックパッカー(フリーター）の働き方があてはまるだろう。このバックパッカーについて，Sは次のように語る。

> *バイト先に海外のバックパッカーをしてる人がいて，日本で1，2ヶ月もうメチャクチャ働いて，そのお金で海外を旅して。3ヶ月ぐらい外国行って，また日本に帰ってきて，頑張って働いて,またすぐパッって海外に行っちゃうみたいな。「それは何でなの？」って聞いたら，やっぱ旅がしたかったって。で，世界にはいろんな場所がある，たとえば海がきれいとか，日本では見られない場所がたくさんあるから俺は海外行くんだ,って。その生き方はすごい，あぁ，いいなって思いました。それはその人らしい生き方だし，何のために仕事しているかが分からないみたいな人に比べて，こういう人もいるんだなと思いましたし，あぁ，こういう生き方もできるんだなみたいな。*

このようにSにとっては，このバックパッカーの姿は前述の銀行員やシャインさんとは正反対の憧憬の対象になっている。また,近年の若者に支持されているやりたいこと志向に則るならば,このバックパッカーは，やりたいことのために働いている「良いフリーター」ということになるだろう。

しかし，働くことの意味に注視してみると，銀行員やシャインさんと同様に，バックパッカーも働くことを手段視しているらしいことがわかる。言い換えるならば，働くこと自体は手段としての意味しか持っていないために，もし海外旅行という目標が失われたならば，途端に働くことの意味をも失うのである。働くことが目標実現のために仕方なく引き受けなければならない手間や労苦でしかないと捉えるとしたら，いかに外見上の姿が正反対であろうとも，働くこと自体との関わりにおいて，バックパッカーと銀行員・シャインさんは同質だとは言えないだろうか。

このことは,「日本的な自己実現」(終身雇用や年功序列制度を背景に，一生懸命働いて業績をあげれば地位や収入があがるという価値観）を強いる社会からの解放を目指して旅に出たはずのバックパッカーの一部は，帰国後にその旅の経験をアピールして企業に採用され，既存の社会秩序に自発的に再参入をするとした大野（2011）の知見とも関連するだろう。また，大野は，その

ようなバックパッカーは,「日本社会の王道を歩んでいくような価値観の再確認」に至るが，その際に,日本社会に復帰できたという“成功物語”が新たなバックパッカーを生み出すという「バックパッカーの再生産サイクル」が現代日本で生じていると指摘している。Sの語りに登場するバックパッカーも,いつの日か日本の企業に正社員として再参入するのだろうか。そして,そのとき,正社員という身分を手に入れた“元・バックパッカー”は,「ちゃんと×手段性」か「ちゃんと×目的性」か，どちらの意味を見いだしていくのか，興味深いところである。

④ 「非ちゃんと×目的性」堀江（2017）の提唱する働くことの意味

さて，この象限に該当する「非・ちゃんと」と「目的性」にあてはまる働くことの意味に関する言及はSの語りの中には見られなかった。つまり，この象限には，Sにはまだ看取されていない未知の働き方があてはまることになる。

そこで，本論では，前著（安藤，2017a）において最近注目されている働き方の例として取り上げた堀江（2017）の「すべての教育は『洗脳』である」[15] における主張を仮に配置することにする（図1ではSの語りからの抽出ではないという意味で網掛け表示にした)。以下は，堀江の主張の中から，本論に直接的に関係する部分を筆者が要約したものである。

> *学校は「工場＝会社」の予行演習として,「時間割の厳守」「全体行動」「一方的な評価」「ボス＝教師の言うことへの服従」という「常識」や，多くの国民を出産（製造）してくれるよう「あるべき家庭像」を植え付けている。その意味で，国家・企業・学校は，今なお決して切り離せない「鉄のトライアングル」である。しかし，テクノロジーとインターネットの発展により，国境に関係なく自由な交流が可能になった現代では「国の権威」よりも「テクノロジーの利便性」のほうが人々にとって重要になってきている。もはや学校教育で「洗脳」されたような「いい大学を出て，いい会社に入り，終身雇用が約束された中で結婚相手を見つけ，子どもを作り，マイホームの一つも手に入れる」という「常識」をあてにしても，やりたいことも幸せも実現できない。この「洗脳」から抜け出すためには，学校と直結した洗脳機関である会社との関係性を考え直すことが必要である。多くの会社では，会社の目的が「仕事」ではなく「秩序の維持」になってしまっている。「仕事」ができない会社であるなら辞めるべきだ。会社に籍を置かなくても,十分安全に生きていけるし,人づきあいもできる。そのような脱会社的な考え方を持てば，お金のために我慢して働くという固定概念から脱却できる。そして,「新しいものを生み出したい」という意思に基づく開かれた共同体の中で,やりたいことに没頭し自分で自分の仕事を作り出すことができるようになり，自分の力を全て解放して生きる喜びを実感することができる。*

15）前著（安藤,2017a）にも注記したが,2017年3月発行のこの本は,少なくとも2017年6月時点までインターネット書店アマゾンの教育学カテゴリーの売れ筋ランキングを第1位であった。本論執筆時の2017年11月現在でも同カテゴリーの第5位である。アマゾンのカスタマーレビュー（116件）の評価は5満点中4.3で，高評価とみてよい。とにかく広い支持を集めているらしいことはうかがえよう。

堀江（2017）の主張においては，Sの言う「ちゃんと」の3要件（ⓐ定職，ⓑ一定の時間リズム，ⓒ子どもがいる既婚者）は全否定されていることから，この主張が「非・ちゃんと」に該当することは明白である。また，お金のため，会社の秩序維持のためといった手段性をも全否定し，ただひたすら自分のやりたいことに没頭してそれを仕事とすることを推奨していることから，この主張が「目的性」に該当することも明白である。Sにはまだこのような働き方は想像の範囲外にあるのだろう。

さて，堀江は，上記の要約にもあるように，「没頭」して働くことの重要性を著書の全編にわたり強調しており，その性質について次のように述べている。すなわち，「何のために何をするのか，どんな風にするのか，すべてを自分で決め，自ら突き進む力」「早く先に進みたい，じっとしていられないワクワク感」「わき目もふらずに没頭し，がむしゃらに取り組める体験」「夢中になっているからこそ，人は一日中それについて思考を巡らし，新機軸を思いつくことができる。失敗を恐れずに試行錯誤を重ね，努力や苦労の過程も含めてすべてを楽しむことができる」などである。これらは②の銀行員・シャインさんや，③のバックパッカーよりもはるかに自由度の高い，いわば“究極のやりたいこと志向”と言える。

また，これらは，最近の欧米のキャリア研究で注目されている天職（calling）[16] の性質に近似している[17]。たとえば，Dobrow, S. R., & Tosti-Kharas, J.（2011）は，天職を「ある領域に向かわせる圧倒的かつ有意義な情熱」と定義し，情熱，絶対性，多大な満足，自負，障害の克服性，いつも心にあること，それが無ければ人生の意味が減少すること，それが自分を突き動かし満たすこと，などの構成要素をあげている。これらは上記の堀江の記述とほぼ一致するが，その意味では，堀江の主張が，わが国に限らず，世界的規模で求められている働くことの意味に関する何らかの要素を掴んでいることは確かだろう。

ただし，堀江の提唱する「没頭」は，ただ単純な没頭に留まるものではない。たとえば，「投資型思考」で「1万円を『使う』ことによって10万円へ，100万円へ増やしていくように自分自身の市場価値を高めていく」ことや，過去は「再利用できる資源」にはなりえないので「損切り」（含み損が総じている商品を早めに手放し，損失を最小限に抑える手法）の対象にしていくこと，そして，「代わりがいくらでもいるポジションではなく，『多少のお金を積んでも，この人でなければ困る』と思わせる地位」を得て自分の「時価総額」を上げていくこと，などの成果を効率良く生み出す働き方としての「没頭」なのである。

16）安藤（2014b）で指摘したように，わが国ではキャリア研究としての天職（calling）研究はまだ稀であるが，柏木（2015）は質問紙調査により，大学生でも約3割が高いコーリングの意識を持ち，その強さとキャリアに対する自己効力感の強さに正の相関関係があることを明らかにしている。なお，柏木は，「天職」という言葉は，日本では特定の職業や宗教的意味合いを連想させる可能性があるため，近年の欧米のキャリア研究で用いられている「コーリング」をそのまま用いたと述べている。今後の国内の研究では「コーリング」という用語が定着するのではないか。

17）他の近似した概念として，Csikszentmihalyi（1990/1999）が提唱した，様々な職業に従事する人が活動中に経験する至高経験や幸福感である「フロー」（Flow）がある。

また，これらの働き方は金融用語で説明されている。ここで直ちに連想されるのは，有利な交換比率を追究する市場原理が浸透した現代社会で生じている,「生きるとは,自分が所有する身体・能力を活用して，自分の生から，快と満足を絞り出すプロジェクトだ」とする観念「プロジェクトとしての生」（大庭，2008）である。つまり，堀江の主張する働き方とは，まさに，個人が「自分のもの」（生命・身体・諸能力）を元手としたプロジェクトを経営する事業主であることを奨励するものだと言えるのではないだろうか[18)]。

仮にそうだとしたら，次のように考えられないか。堀江の提唱する働き方は，外に現れる姿としては自由で開放的なものであるが,「プロジェクトとしての生」に基づいているという点において，①の“感謝される”という手応えを期待して働くこと，②の「生きるため」の手段として働くこと，③の旅行資金を稼ぐために働くこと，と通底する。「プロジェクトとしての生」の下，われわれは働くことによって，自分の能力によって作り出した“成果”（感謝，生活，旅行資金，時価総額など）を常に周囲にアピールし続け，自分自身でも評価し続ける。それが現代社会における働くことの意味であり，そこで成果を提示できなければたちまちにして生きていることの意味をも失う。つまり,「生きること」と「働くこと」の健全な関係性から隔たった,いびつな循環の，ある一端が④の堀江の主張であり，また別の一端が①であり，②であり，③である。そのように捉えてみることは，本論で示した4象限の意味構造の性質を明確にする可能性を含んでいると考えられる。

3-2-3　まとめ～「善財童子キャリア」との接点も視野に～

以上，本論では，Sのライフストーリーを踏まえた上で，Sの「働くことの意味」に直接的に関係する語りを総合的に検討した。その結果を,「ちゃんと―非・ちゃんと」をタテ軸,「目的性―手段性」をヨコ軸とする2軸4象限で示し,①“感謝されること”動因による働くことの意味，②銀行員とシャインさんによる働くことの意味，③バックパッカーによる働くことの意味，④堀江（2017）の提唱する働くことの意味のそれぞれについて論じた。この4象限の意味構造についてはさらなる精査が必要であるが，現時点での課題を一つだけあげたい。

それは，現代社会において,「プロジェクトとしての生」という観念に拘束されずに，働くことの意味を見いだすことははたして可能なのか，ということである。それについては,「善財童子キャリア」[19)]（安藤，2014a）がヒントになるかもしれない。善財童子キャリアは，①転職が頻回であり，②その個々が社会的地位や賃金の上昇を第一に目指すものではなく，③それぞれの職においては誠実に人とかかわり，④とりわけキャリア全般を通じて職を通じての学習性が高く，⑤これらの実現のためであれば遠距離でも地域移動をいとわない，そして，⑥結果として，徐々

18）そもそも堀江の著作自体，堀江個人によって執筆されたわけではなく，スタッフとのプロジェクト作業の成果物のようである。堀江（2017b）によると，堀江の主宰するサロン・堀江貴文イノベーション大学校（HIU）には「『編集学部』という有能な出版チーム」がある。

19）善財童子とは，仏教の経典「華厳経」に登場する，様々な職に就く53人の師を訪ねて修行し悟りに至ったとされる若者である。そのイメージを，頻回転職者のメタファーとして用いた。

にではあっても本人の内面的豊かさに資するものとなる，という要件で構成されている。また，安藤（2014b）は，それに該当する頻回転職者（すなわち，本論で言う『非・ちゃんと』）のA氏とB氏の対話的語りの検討[20]から，両氏の認識の共通点として「個人の経済活動に相対的な比重を置くのではない，生きることそのものを中心に据えた職業観」を抽出している。そのような特徴は，「プロジェクトとしての生」とは大きく異なるため，働くことの意味についての今後の検討要素として視野に入れることは有益であろう。

3-3　キャリア教育科目への示唆と今後の課題

本論の分析結果から得られるキャリア教育への示唆を述べる。

3-3-1　キャリア教育科目への示唆

①「働くことの意味」を考える際には，「働くことの意味」だけを考えないこと。

これは，いささか逆説的な表現ではあるが，本論で検討したように，生きることの意味を矮小化している「プロジェクトとしての生」という観念の上に，現代の働くことの意味が築かれているとしたら，まずは「生きるとはどういうことか」にも関心を向ける必要がある。そもそも働くことは生きることの一側面なのであり，決して「働くこと＝生きること」ではない[21]。授業内で扱うことは難しくとも，少なくともキャリア教育に関わる教員（以下，教員）は，「生きるために働く」といった紋切り型に留まったり，産業社会の論理を一方的に説いたりするのではなく，生きることと働くことの全般に関する歴史的，倫理的，教育的等々の知識と教養，また，教員自身の働くことの意味の自己省察など，要は「引き出し」を多くしておく努力が求められる。

②　学生が身近な人物の働く姿から何を看取しているかについて敏感であること。

Sが中退に至った背景の一つには，「ちゃんと」就職しているはずの銀行員・シャインさんに対する失望，「非•ちゃんと」のはずのバックパッカーへの憧憬があった。「ちゃんと」の人は「辞めたい」と言い，「非•ちゃんと」の人は旅を楽しんでいるという姿は，大学における主流の（す

20）A氏とB氏はともに40代男性である。A氏は大学を中退した後に，畜産→頻回転職→現職の小学校教師というキャリアを辿っている。B氏は，大学卒業後に念願の中学校教師になったものの，短期間で辞め，頻回転職→現職の畜産というキャリアを辿っている。安藤（2014b）は，就業順序において完全に逆行しているこの両名がキャリア観について対談した内容を分析し，「善財童子キャリア」モデルの深化を試みたものである。

21）最近，この「働くこと＝生きること」という表現をしばしば見聞きする。これは，“働くことがまるで自分の全人生であるかのように充実したものに感じられる”とでも言うべきところを，言葉を省略してキャッチフレーズのように表現したということなのだろう。しかし，その省略の仕方は乱暴で，こう表現することによって，生きることの位置付けをジリジリと貶めるような結果をもたらしていると筆者は考えている。その意味で，社内向けの理念集に「365日24時間死ぬまで働け」と記していた企業が，社会的批判を浴びて改訂した後の文言が「働くとは生きることそのものである」であったことは象徴的である。働くことは，いつから生きることと等価値になったのだろうか。

なわち正社員志向の）キャリア教育が伝えていることと矛盾する。学生は教員が授業中に100回示す理念型よりも，日常的に接している人が1回示しただけのリアリティから働くことの意味を看取している可能性もある。個々の学生がいったい誰の，どういう働く姿から，何を学んでいるのか，学生にその掘り起こしをさせることでそれを可視化し，結果についての自己省察や意見交換をさせる取り組みは有益ではないだろうか。そして，その際に教員の「引き出し」がモノを言うことは言うまでもない。

③　自分が働くことで，組織や周囲にどのような影響を与えるのかにも関心を向けさせること。

本研究で示した4象限は，杉村（1990）による「近代的労働の意味構図」を参考にしている。しかし，杉村が示したのは，「個人―組織」軸と「手段―目的」軸とからなる2軸4象限であったが，本論ではSの語りに「個人―組織」に関する要素が見られなかったため，「手段―目的」のみを採用したという経緯がある。筆者の経験も合わせて考察すると，接客アルバイト経験の影響か，“お客様からの感謝”とか，“周囲の気分を害さない”といった，その場その場の気配り的なことには長けている学生は，珍しくない。しかし，その反面で，自分の働くことが周囲にどのような影響を与えるかということを大局的・客観的に眺めることを難しく感じる学生が多いようである。キャリア教育科目でしばしば参照される尾高（1995）による職業の定義には，収入を得ること（経済的側面），個性の発揮（個人的側面），人間関係の形成（社会的側面）という3つの側面が含まれるが，このうち社会的側面に関心を向かわせる取り組みがとくに必要なのではないだろうか。

④　大学中退の“予防”にも関心を持つこと。

キャリア教育科目とは直接的関係はないかもしれないが，広義のキャリア教育に関係することとして中退予防への示唆についても簡単に触れておく。Sが大学不適応を感じるようになったきっかけの一つは友達ができなかったことである。そこからは，初年次ゼミのいっそうの充実やそれ以外の場での居場所作りの取り組み強化の必要が示唆される。また，入学前にイメージしていた学修内容とのギャップがあった場合へのフォローとして，転学部のハードルをある程度低くすることも一考の余地があるだろう。さらに，パチンコ等ギャンブルへの啓発が必要だろう。近年のパチンコ機器はさらに射幸心をあおるような仕組みになっていると聞く。教員もギャンブル依存に対する正しい知識を持つことが求められる。

3-3-2　今後の課題

本論は，S一人の語りをデータとする探索を試み，ここまでに述べた諸知見を導出した。本論では主に「プロジェクトとしての生」の側面に注目したが，働くことについてそれとは異なる性質（たとえば，前述の善財童子キャリア，あるいは，われわれが全く予想もしていないような性質）を，働くことの意味として看取している大学生もいるだろう。それらの異なる意味の発見と検討を今後の課題としたい。その際は，近代以降の主要な労働論（たとえば，Karl Marx，Max Weber，Hannah Arendtの提唱した各理論）を踏まえた理論面での深い検討も必要になるだろう。

また，Sは，経済的困窮というやむを得ない事情もあって中退した。しかし，中退など目立っ

た“問題”として顕在化はしていなくとも，周囲の働く人達を見て“あんなふうには働きたくない”と失望し，そのことで学修や卒業後のキャリア形成に対する関心や意欲を減じてしまっている大学生は，実はかなり多いのではないか。大学は，社会に出る前の最後の学校教育段階としての責務を負うとされる。働くことと大学教育の適切な関係性について，現代の大学生を取り囲む社会のリアリティを取り込んだ探究を継続していくことも本論の今後の課題だと考えている。

追記

本論脱稿にあたり，Sに近況を尋ねるメールを送ったところ，リハビリ助手として働き始めたという旨の返信があった。インタビュー時に語っていた理学療法士になりたいという目標に向けての行動を開始したようである。

本論は，Sによる「人って何のために働くんですか」という真摯な問いとインタビュー協力なしには執筆できなかった。この場を借りて，S氏に厚く御礼申し上げる。

引用文献

安達智子（2004）大学生のキャリア選択―その心理的背景と支援　日本労働研究雑誌533，27–37.

阿部峰子（2013）大学生等のいる母子・寡婦世帯の母親の生活　教育福祉研究19，19–35.

安藤りか（2014a）頻回転職の意味の再検討―13回の転職を経たある男性の語りの分析を通して　質的心理学研究13，6–23.

安藤りか（2014b）「善財童子キャリア」モデルの深化のための検討―2人の頻回転職者の対話的語りの分析を通して―名古屋学院大学論集　社会科学篇50–4，121–140.

安藤りか（2015）大学におけるキャリア教育に対する批判について―再批判に向けた問題の整理―名古屋学院大学論集社会科学篇52–1, 133–147.

安藤りか（2017a）大学のキャリア教育科目における「働くことの意味」の検討―テキストの記述を手がかりに―名古屋学院大学論集（社会科学篇）54–1，65–80.

安藤りか（2017b）大学のキャリア教育科目では「働くことの意味」をいかに教えるべきか―学生の自由記述を手がかりとする質的研究アプローチによる検討　経済社会学会第53回全国大会報告要旨集　53–56.

池内裕美・藤原武弘（2009）喪失からの心理的回復過程　社会心理学研究24–3，169–178.

伊藤嘉奈子（2008）フリーターとニートのイメージに関する一考察　鎌倉女子大学紀要13，43–50.

今津孝次郎（2008）人生時間割の社会学　世界思想社

岩間夏樹（2010）若者の働く意識はなぜ変わったのか―企業戦士からニートへ―　ミネルヴァ書房

上野耕平（2007）運動部への参加を通じたライフスキルに対する信念の形成と時間的展望の獲得　体育学研究52，49–60.

大内裕和（2017）奨学金が日本を滅ぼす　朝日新聞出版

大嶽さと子・多川則子・吉田俊和（2010）青年期女子における「ひとりぼっち回避行動」に対する捉え方の発達的変化―面接調査に基づく探索的なモデル作成の試み―　対人社会学研究10，179–185.

大谷　尚（2008）4ステップコーディングによる質的データ分析手法SCATの提案―着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き―　名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）54–2，27–44.

大谷　尚（2011）SCAT: Steps for Coding and Theorization―明示的手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的データ分析手法　感性工学10-3，155-160.
大谷　尚（2014）医学研究における研究倫理・座談会（話者：青松棟吉・大谷　尚・西城卓也）医学教育45-4，249.274.
大谷　尚（2016）質的研究とは何か―その意義と方法―　日本歯科医師会雑誌66-12，15-24.
大野晋也（2011）アイデンティティの再肯定―アジアを旅する日本人バックパッカーの「自分探し」の帰結―　関西学院大学社会学部紀要111，155-170.
大野貴司・徳山性友（2015）わが国のスポーツ組織の組織的特性に関する一考察―そのガバナンス体制の構築に向けた予備的検討―　岐阜経済大学論集49-1，1-20.
大庭　健（2008）いま，働くということ　筑摩書房
岡部修一（2007）スポーツに内在する問題について（3）　奈良女子文化短大紀要38，117-124.
小川邦治（2016）大学生にとっての「働くことの意味」に関する探索的研究　西南学院大学人間科学論集2，69-82.
尾高邦雄（1995）尾高邦雄選集第1巻　職業社会学　夢窓庵
柏木　仁（2015）キャリア研究におけるコーリングの概念的特徴の明確化に向けて―コーリングとキャリア関連変数との関連性およびタイプ分け―　経営行動科学27，209-304.
勝又幸子（2003）国際比較からみた日本の家族政策支出　季刊社会保障研究39-1，19-27.
和　秀俊・遠藤伸太郎・大石和男（2011）スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの家庭：男性中高生競技者の質的研究の観点から　体育学研究56，89-103.
上瀬由美子（2008）大学生が抱く社会人・サラリーマンステレオタイプに関する予備的研究―描画を用いた検討―　江戸川大学紀要「情報と社会」18，1-10.
上瀬由美子（2009）大学生の社会人ステレオタイプと就職意識　江戸川大学紀要「情報と社会」19，1-13.
河合隼雄（1992）こころの処方箋　新潮社
川原祥子（2016）大学に友達がいない「ぼっち」対策に力を入れる大学の今―誰とも会話を一日せず，4年間で友達ゼロの大学生も―　ひみつ基地2016年10月号44.
https: //children.publishers.fm/article/13201/（2017/10/28閲覧）
喜始照宣（2015）第2章　ハローワークに来所した中途退学者の実態①：学校時代と中退後の生活を中心に　堀有喜衣・小杉礼子・喜始照宣著　大学等中退者の就労と意識に関する研究　JILPT調査シリーズ138，61-88.
熊上　崇（2014）大学生におけるパチンコ・スロットの頻度と意識―首都圏の一大学における調査から―　立教大学コミュニケT福祉研究所紀要2，49-60.
小泉　晃（1985）わが国における「瓜2つ妄想」の精神病理学的研究　弘前医学37，814-832.
厚生労働省（2015a）平成27年就労条件総合調査結果の概況　p. 23.
厚生労働省（2015b）第1回女性の活躍促進に向けた配偶者手当の在り方に関する検討会資料　p. 26.
小林正之・王　傑・王　帥（2017）経済的要因による学生の休学と中退　リクルートカレッジマネジメント202，6-14.
佐々木英一（2009）現代における職業指導の役割と課題―ノン・キャリア教育の構築「ノン・キャリア教育としての職業指導」 学文社
下村英雄（2002）第4章　フリーターの職業意識とその形成過程―「やりたいこと」志向の虚実　小杉礼子（編）「自由の代償　フリーター」 日本労働研究機構
スポーツ庁（2016）平成28年度　全国体力・運動能力，運動習慣等調査

杉村芳美（1990）脱近代の労働観　ミネルヴァ書房
竹信三恵子（2017）正社員消滅，朝日新聞出版
辰巳哲子（2015）大学中退後のキャリアに影響する大学入学以前の経験　Works Review 10，6–15.
田辺　肇・小川俊樹（1992）質問紙による解離性体験の測定―大学生を対象にしたDES（Dissociative Experiences Scale）の検討―　筑波大学心理学研究14，171–178.
徳永幹雄・橋本公雄・高柳茂美（1994）スポーツクラブ経験が日常生活の心理的対処能力に及ぼす影響　健康科学17，59–68.
戸塚唯氏（2008）夢追い型，無目的型，不本意型のフリーターに対する大学生の態度　千葉科学大学紀要1，81–88.
日本私立大学連盟（2015）私立大学学生生活白書2015（編集・北條秀勝，監修・吉崎智哉・國廣敏文）
日本生産性本部・日本経済青年協議会（2017）平成29年度　新入社員「働くことの意識」調査結果
日本中退予防研究所（2010）中退白書2010―高等教育機関からの中退―（監修・ピースマインド総合研究所）NEWVERY
日本能率協会（2016）第7回ビジネスパーソン1000人調査―仕事と感謝編
野口康彦（2012）親の離婚を経験した大学生の抑うつに関する一検討　茨城大学人文学部紀要人文コミュニケーション学科論集12，171–178.
帚木蓬生（2014）ギャンブル依存国家・日本 パチンコからはじまる精神疾患　光文社
林　壮一（2015）間違いだらけの少年サッカー―残念な指導者と親が未来を潰す―　光文社
早野俊明（1992）親の子に対する学費負担をめぐる一考察　早稲田法学会誌42，383–419.
早野俊明（2015）大学在学中の成年子に対する親の扶養義務　白鴎法学21–2，295.–318.
福田　舞・田邊敏明（2011）大学生におけるパチンコ嗜癖と職業未決定との関連　山口大学教育学部研究論叢（第3部）芸術・体育・教育・心理61，253–267.
朴澤康男（2012）学校基本調査に見る中退と留年　IDE　12，64–67.
堀江貴文（2017a）すべての教育は「洗脳」である―21世紀の脱・学校論　光文社
堀江貴文（2017b）好きなことだけで生きていく　ポプラ社
本田由紀（2008）軋む社会　双風舎
本田由紀（2009）教育の職業的意義―若者，学校，社会をつなぐ　筑摩書房
三井住友銀行コーポレート・アドバイザリー本部企画調査部（2017）外食業界の現状と今後の方向性
宮入小夜子（2013）社会人との対話が学生の職業観・勤労観の形成に与える影響―キャリア教育に関する準実験による実践的研究―　日本橋学館大学紀要12，17–31.
文部科学省（2014）報道発表・学生の中途退学や休学等の状況についてhttp://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/26/10/__icsFiles/afieldfile/2014/10/08/1352425_01.pdf#search=%27%E5%A4%A7%E5%AD%A6+%E4%B8%AD%E9%80%80%E7%8E%87%27（2017/10/25閲覧）
文部科学省（2019）平成29年度学校基本調査　調査票様式　高等教育機関　大学院学生内訳票
柳沢直恵・朝倉真理・大家ゆず子・岡田直也・佐藤元己・水木将・百崎恭平・津田洋子・塚原照臣・野見山哲生（2011）一大学におけるギャンブリングに関する実態調査　信州公衆衛生雑誌6，64–66.
吉塚久記・下條聖子・本多裕一・吉田亮平・浅見豊子（2016）専門学校における現役入学生と非現役入学生の学習動機の特徴―理学療法学科および作業療法学科での3年間の比較研究―　理学療法科学31–2，343–348.
Camus, A.（1943）Le mythe de Sisyphe（カミュ，A. 清水　徹/訳（2005）シーシュポスの神話　新潮社）
Carnegie,D.（1944）How to Win Friends and Influence People（カーネギー，D. 香山晶／訳（1999）道は開け

る　創元社）

Csikszentmihalyi, M.（1990）Flow.（チクセントミハイ，M. 今村弘明/訳（1996）フロー体験喜びの現象学　世界思想社）

Dobrow, S. R., & Tosti-Kharas, J. (2011). Calling: The development of a scale measure. *Personnel Psychology* 64–4, 1001–1049.

Fontana, A. & Frey, J. H.（2000）第1章　インタビュー：構造化された質問から交渉結果としてのテクストへ（平山満義/監訳　大谷　尚・伊藤　勇/編訳（2006）質的研究ハンドブック3巻　北大路書房）pp. 41–68.

Freud, S.（1919）Das Unheimliche（フロイト，S.　中山　元/訳（2011）ドストエフスキーと父親殺し/不気味なもの　光文社）

Sacks, O.（2012）Hallucinations（サックス，O. 大田直子/訳（2014）見えてしまう人びと―幻覚の脳科学―　早川書房）